

## 人生の海図（1）

### 1 ミネルヴァのふくろうは黄昏に飛びたつ

①ドイツ観念論の完成者ヘーゲルは、人がいかに歴史の教訓を学ぶのに遅いかを嘆いた。『法の哲学』の序文にはあの有名なエピグラムが記されている。

ミネルヴァのふくろうは、黄昏とともに飛び始める。

ミネルヴァは、ローマ神話の知恵の女神である。黄昏も濃く、深い暗闇が迫って始めて人は知的成熟に至る。歴史の教訓を思い知る。だが、もうその時では遅い。

②身につまされる言葉である。

わたしも、人生の黄昏が近くなつて、やつと事象の背後にあるものが、明晰な輪郭をもつて見え始めてきた。長い間の経験と思索を重ねて、自分なりの哲学、世界観が見え始めてきた。しかし、人生の実相に気づいた時には、もう人生の終末がそこに迫っている。

③わたしは青春期から、多くの先人の言葉に生き方を学んできた。

まずは、野村克也さん（元野球監督）の威勢のよい言葉を手がかりに、考えてみよう。

人生から逃げたとき、人は敗者になる。誰にでも試練や苦難がある。それを乗り越えた経験は、人生の財産となる。試練を歓迎するくらいの気持ちで向き合えば、人生は拓けるものだ。

全盛期を過ぎ、落差に耐えつつ、必死にやる、なんてことを慘めと感じる人はいるでしょう。ところが、僕はそうは思わないんですよ。なりふり構わず、自分の可能性を最後の最後まで追求する。そのほうが美しいという、これは僕の美意識です。

④人を勇気づける言葉だが、それもこれも、野村さんにまだ気力・体力が残っていればこそである。

ところが、妻を喪った後に野村さんが語った言葉（後述）からは、こんな見方はまだまだ甘かったことが分かる。

## 2 誰も人生を知らない

①20代の始めに、おぼろげながらでも人生の海図を知っていれば、わたしの人生は違っただろう。

当時のわたしは、人生について全く無知だった。人生を無限のものと考えていた。そして、決断すべき時に決断せず、挑戦すべき時に挑戦せず、悩む価値もないことを無駄に悩み、些細なことで他人と争っていた。

そして、いまを楽しむべきなのに、不満をいって暮らしていた。

②両親も、恩師も、先輩も、友人も、わたしに人生を教えてくれなかつた。

折りにふれて忠告してくれることはあったが、それは目前の問題をどう解決するかのヒントにすぎなかつた。

人生の三階段を踏まえたうえで、どのように日々を過ごすべきかを、真正面から教えてくれる人はいなかつた。

老齢になつたいま、それも当然だと分かる。彼らも人生を知らなかつたのだ。

## 3 人生の三段階

①わたしは、多くの人々と同様、海図もなしに人生という航海に船出した。

わたしは人生の解を書物に求めた。こうして思想遍歴が始まった。

日々の生活はむしろ充実していたが、30代になると虚無主義(ニヒリズム)に傾くようになる。だが、虚無感では、現実を生き抜いていけない。

到達したのは、「軽やかなニヒリズム」という考えだった。人生は虚無だが、日々の現実には快活に適応して生きる。そんな感じである。

②40代始めになって、人生の相貌<sup>そうめう</sup>を垣間見た気がした。

人生は

—夢みる青年時代

—多忙な中年時代

—侘しい老年時代

の三階段に分けることができる。

③青年時代に人生を考える時間をもち、中年時代にいまを楽しむ余裕をもち、老年期に充実した生活を送れる人は稀である。

一所懸命な青年期の次に来るのは多忙な中年期であり、その果てには侘しい老年期が待っている。これが多くの人の人生の構図である。

#### 4 夢みる青春時代

①明治以来、日本人は毎日毎日を駆け抜けてきた。ただ、息せき切って駆け続けてきた。なんのために駆け続けているのか、立ち止まってそんなことを考える余裕もなしに。

よい成績をとるため、一流校に入るため、一流企業に就職するため、社内で昇進するため駆け続けた。絶え間ない競争の果てに「バラ色の人生」があるという思いにとらわれて。

②一所懸命は果たして美德だろうか？いや、もっと大胆にいえば、それは愚かさの裏返しではないか？

日本人のこの愚かさを、森鷗外は小説『青年』の中で、主人公に大意こう語らせている。

いったい日本人は生きるということを知っているのか。小学校に入ると一所懸命学校時代を駆け抜けようとする。その先に人生があると思うのである。

職業につくと、その職業を完全になし遂げてしまおうとする。その先には人生があると思うからである。しかし、その先に人生はない。

日々の生活の中にしか、どこにも人生はないのである。

③青年時代、多くの若者は未来の幸福を夢みるだろう。しかし、それはやがて幻想であることがはっきりする。めくるめく幸福などどこにもありはしない。

あるのは今現在だ。貴重な現在をやれ付き合いだ、飲み会だ、ゴルフだと、遊興に消費するには、人生は短すぎる。

④40代になつたら、半生を振り返ってみるとよい。青年時代に追い求めた甘美な幸福を手に入れただろうか。未だ入れてはいない。

では、これからどうやって手に入れるのか。仕事の責任は重く、体力は衰え、精神的、肉体的ストレスは募るばかりである。

それなのに、人はありもしない夢を求めて、貴重な毎日を無為に過ごしていく。これが多くの人の現実である。

## 5 多忙と賢明は矛盾する

①中国の思想家である林悟堂は、「賢明」についてこう述べる。

眞に教養のある人とは、春風駘蕩<sup>しゅんぷうたいとう</sup>の趣があり、決してあくせくしない人をいいます。

「多忙」と「賢明」とは矛盾する様です。

賢人は忙しい事はありません。逆に、あまりに忙しい人は、賢人とはいえません。

従って、最高の賢人は、最も優雅に振る舞う人をいうのでしょうか。

②「弁護士は激しく働き、稼ぎ、そして貧しく死ぬ」という、アメリカの諺がある。

この「貧しく死ぬ」とは、精神的に貧しく死ぬという意味も含むだろう。

わたしも、6分刻みのタイムシート（業務日誌）をつける仕事をしてきたから、内心忸怩<sup>じくじ</sup>たるものがある。

「あまりに多忙であること、あまりに仕事をしすぎることは、教養のないしるしである。教養のない人と話していても退屈なだけである。時間の無駄である。」

皮肉屋のショーペンハウエル（哲学者）だったら、わたしの仕事ぶりを見て、きっとこういったに違いない。

③多忙を誇る人々は、実は忙しいわけではないのだ。たいていは要領が悪いから、見切りが悪いから忙しいのだ。もつといえ、人生の意味を知らずに、日々を消費しているのだ。人生の構図を知らないから、目の前の仕事に囚われ、仕事をコントロールする代わりに、逆に仕事にコントロールされている。一所懸命は、愚かさの象徴である。

④人生を知る者なら、日々の生活を意識して規制しなくてはならない。いかに仕事が山積みしていくようと、精神的には余裕があり、思索や運動や生きがいに没頭する時間を見出し、心

は落ち着いている人間でありたい。

## 6 中年の精神危機

①青年期に一所懸命に努力したのち、中年期には何が待っているか？

思いもかけぬ空虚感と身体の変調である。

年をとるに従って経験も積み、悩みに上手に対処できるかというと、全く逆である。家族は増え、役職も多少は上がり、責任はしだいに重くなる。

②一方で、体力は衰えるから、精神の切れは鈍る。悩みはますます深刻になっていく。

多くの人は盲目的に悩む。悩みに圧倒されてしまい、悩みを解消する方法を考える余裕もない。ただ狼狽し、右往左往する。

若い時に逆境にあい、逆境に耐える方法を身につければ別だが、そうでないと人生の重みに耐えるのは容易ではない。

③悩みを克服する方法をもたずに、中年になって突然深い精神的危機に囚われたら目も当てられない。わたしは、何の挫折もなく順調に昇進してきた優等生が、仕事と生の重圧に耐え切れず、40代半ばで精神的変調に陥った例を数多く知っている。自殺した知人もいる。

④中年になって、ウツや精神の変調で苦しんだ知名人の告白を見てみよう（文芸春秋1983年5月号）。

直木賞作家の綱淵謙錠氏。

53、4歳の頃、精神的に参ってしまった。なんとなく人生が白茶気て見えるんです。すべて判っちゃって、つまらなく思えた。

子供は一応大きくなったりし、女房とも遠くなったり感じで、「やっぱりオレは独りなんだ」という寂寥感に襲われたわけです。対人関係もどうでもよくなったり、自分の不機嫌さをそのまま表に出したりしましたね。前に肝臓を患って生涯禁酒をいい渡されてましたけど、再び酒を飲み始めたのもその頃のことです。今思ひ返してもゾッとするところがあります。

⑤国文学者の谷沢永一氏。

わたしは40歳ちょっと前に猛烈なうつ病に見舞われたんです。学者としての第一期にあたる頃、関西大学出身というハンディもあってひどく落ち込んだ。読書や執筆はいっさい不可能、新聞も読めずテレビすら観れないんです。いっそ死んじやおうか、とまで思い詰めましたよ。わたしは大酒を飲みました。ひたすら飲んで、飲みまくった。酒が命を救ってくれたんです。うつ病で酒を飲めない人は、皆クビを吊っていますよ。

⑤劇作家の矢代静一氏。

40歳を過ぎて、創作に完全に行き詰ったんです。劇作家というのは小説家、絵描き、音楽家とちがって、位置がもっとも一般社会に近い。評価も客席からモノにくる。尊敬する批評家が途中で帰っちゃったりすると、もう発狂しそうになるんです。

それと集団性からくる人間関係の煩わしさ。それに耐えられなくなってきたんですね。

それでどうしたかというと、以前からカトリックに関心があったんで、本格的に勉強を始めたわけです。僕が好きで尊敬する作家はみな、不思議にキリスト教に近づきながらも、最後には自殺しているんですね。

僕にもその気はある。だから決意して、42歳の厄年のときカトリックに入信したわけです。

(続く)